

総合俳句論

第五章 総合俳句の試み

1 明るさと深さと

水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ

高橋正子

村上春樹三十歳（一九七九）の時の小説「風の歌を聴け」を読むと、大江健三郎二十二歳（一九五七）の時の小説「死者の奢り」との違いに、二十年余り隔てた時代の移り変わりの大きさを思う。大江健三郎は、当時東大仏文科の学生であって、サルトルの実存主義の影響を受けた作家として登場した。村上春樹は、当時早大演劇科を卒業し、アメリカ文学から影響を受けた作家として登場した。村上春樹の「風の歌を聴け」の最後の一行にニーチェの言葉が引用されている。「昼の光に、夜の闇の深さがわかるものか」である。この小説での「昼の光の明るさ」と「夜の闇の深さ」との対比には、アメリカ的な二者択一を読み取る。漱石鷗外に始まって、日本の多くの作家がヨーロッパに影響を受けてきたが、村上春樹には、それとは違った文体や考えがある。

「多様な俳句への新たな展開を」を願って、私の今回の論考は、「明るさと深さと」を取り上げた。村上春樹とは違った視点からである。私達の俳句雑誌「花冠」は、「明るくて深いところ」のある俳句を目指しているが、この「明るさと深さと」は、二者択一的なものではない。「明るさ」と「深さ」を共時的に、同時に作品に表現できるものではないことも承知している。俳句の一句でもって、「明るさ」と「深さ」を表現することはできない。「明るくて深いところ」は、作者の心境にあって、作者の心の姿にある。作者の表現の問題よりも、作者の心の姿を読み取ることが重要なのである。

二十年ほど前の朝日新聞論壇時評で社会学者の見田宗介氏がこれまでの思想や文学には、「明るくて深い」ものは、なかったという結論を出しているが、その後の二十年も同じ状況が続いているので、「明るくて深いもの」は、これからの文学の重要な課題となるであろうし、言葉の作品として、「明るくて深い文学」の創作は、困難であろう。作者の心境、作者の心の姿といったところが問題となるからである。

空海の言葉に「遊心大空」がある。地上の俗世間に心向けけるのではなく、ひろびろとした大空に心向けなさい、という教えである。自然に眼を向け、心に向けていれば、いくらでも心は、深くなるものであり、その心に「明るく

て深いところ」のものが顕われてくる。川本臥風は、俳句についてこう語る。

自然を 観察し 把握し その生命を摘出する
自然を対象とする限り
これほど深みのある芸術が他にあるだろうか

また、臥風の「まこと」は、「ただ心を澄し、感能を鋭くして自然を如実に見る事のみ」ではなく、「大きな、深い人生観が伴った自然感」つまり、「自然を感じる事、自然の意味を讀む事」にあつて、「一生の修行を必要とするまことである。」と言ひ切る。

夏目漱石や森鷗外に代表される日本の純文学には、暗いところがある。西洋の純文学にも暗い作品が多い。そういった事情の中にあつて、文学座創設によつて知られている劇作家岸田國士が「明るい文学」について」と題した、甲と乙との対話形式の作品を残している。その中の冒頭近くで、

明るいところも深く観れば暗いといふのだね。それなら、暗い処も、深く観れば、明るいのかも知れないぜ。

と、「深く観れば」という内観的なところを明らかにし、対話形式の短い作品だが、その結論は、

おれたちは、文学の中に人生そのものよりも、人生を観てゐる作者の眼を探すのだ。そして、その眼の中に、「新しい人生」を発見するのだ。「明るい文学」とは作品の中に光つてゐる「作者の眼の明るい輝き」以外のものではない。

と、「文学の中に人生」よりも、「人生を観てゐる作者の眼」に文学の真実を探す。作品よりも作者の眼であり、文学の世界に「明るいもの」を求めらるならば、作品よりも作者の眼、作者の内面に重点が置かれる。

「明るさと深さ」についての建築学の論文には、勝れたものがある。大野隆造氏（東京工業大学大学院教授）らの、「地下鉄駅における主観的な移動距離及び深さに影響する環境要因」（二〇〇六年）と黄丹鳳氏の「地下鉄駅における心理的な深さに影響を与える要因に関する研究」（二〇〇五年度東京大学修士論文）であるが、問題を客観的なところではなく、主観的、心理的なところに重きを置いている。地下鉄駅の「深くまで降りるとより不安になる傾向が見られる。」と指摘し、「フロアにおいて、広く明るい場所ではより安心感がある。」との結論を得る。より快適な駅を作るための提案は、「フロアでは幅を広くして、

鉛直面照度を上げる。ホームにおいて鉛直面照度は十分と見られるが、幅を広くする。」などである。建築学の論文では、主観的、心理的などところに重きを置いて、「明るさと深さ」の問題を論じているが、俳句の「明るさと深さ」については、作者の心境を、作者の心の姿を取り上げる。一句に表現された言葉に「明るさと深さ」を同時に取り入れることは不可能であろう。作者が表現した言葉ではなく、表現者としての作者の心境に、心の姿に、「明るさと深さ」を感じ取り、読み取るのである。

水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ

正子

蒲公英の数本は吾が影へあり

恵子

ふり仰ぐ天の深さよ春の雪

文彦

蒲公英の種ふと浮び空の詩

啓一

雪すべて降らせて戻る空の青

琴

これらの句は、私の俳句仲間のものだが、「作者の眼」を見ていただきたい。作者の心境、作者の心の姿といったところを読み取っていただきたい。それには、読者は先ず、作者の立っているところを的確に捉える事であり、作者の姿が作者を包む風物、特にその自然とともに、読者の眼にありありと浮かなくなるか、である。そして、「作者の姿」から「作者の眼」を読み取り、「作者の心の姿」を知ることができれば、と思う。俳句を読む、という行為は、「作者の心の姿」を知る、ということであり、作品に描かれた人間や自然を読むだけのことではない。第一句「蜻蛉飛ぶ」の句は、草田男の「冬の水一枝の影も欺かず」と似た心境があつて、作者の視点、心の在りどころが一点に集中されている。一点の曇りもない。第二句「蒲公英」の句は、蒲公英を身近に引き寄せて一つの世界を作った。作者の心の優しさがいい。第三句「春の雪」の句は、春の雪が降っている、唯それだけの世界であるが、そこに、作者の深さと明るさがある。第四句「空の詩」の句は、一瞬の美しさがいい。一瞬が作者の内面でふくらみ、「空の詩」の大きな世界となった。第五句「雪すべて」の句は、時間と空間を捉えて大きな世界を創造した。作者の内面が大きい。

現代文学は暗すぎるので、もっと明るくなった方がよいのだが、「明るくて深い」作品の創作は、困難である。「明るさ」と「深さ」とは、お互いに相容れないところがあつて、「明るさ」は、浅きに流れ、「深さ」には、暗さが纏いつく。この困難を克服し、「明るくて深い」作品を創るには、二つの道がある。一つは、深みのある作品に明るさを求める道であり、他に、明るさのある作品に深みを与える道がある。そして、その成果を上げようと思うならば、長い修練を要するであろう。俳句に「深み」を与えるには、「自然を感じること」、「自然の意味

を読むこと」の長い修練を要する。俳句に「明るさ」を求めるには、社会的な広がりや生産活動の必要、あるいはネット社会の明るさも有効な手段であろう。俳句に「深み」を与えるには、空海の「遊心大空」の教えに従って、ひろびろとした大空に心を向けるのである。自然と接する機会を多く持ち、そこから俳句を拾うのである。俳句に「明るさ」を求めるには、自然を感じ、自然の意味を読み取った句をネット上に発表し、その句を多くの人に読んでいただくのである。自然と接することによる「深み」とネット社会に参入することによる「明るさ」は、相矛盾することはない。それぞれの次元が違うからである。そして、次元の違う多様なものの共生に違和感があってはならないし、多様なものとの主体的な対応が不可欠であろう。混乱のない多様性ということ、自然との交わりによる「深み」とネット社会（あるいはウェブ）による「明るさ」とが俳句作品を通して、何の矛盾もなく読者に見えてくるに違いない。作者の、あるいは読者の心の中では、自然は深く、ネット社会（あるいはウェブ）は明るいのである。

2 ミュージカル「正岡子規」

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

子規

四月七日は、四国松山に久しぶりの帰郷となったが、それは、松山近郊にある坊っちゃん劇場でのミュージカル「正岡子規」観劇のためであって、脚本演出のジェームス三木が「他ジャンルから見た俳句」ということで月刊俳句界（昨年七月号）に書いていた文に興味を持っていた。ジェームス三木は、外地からの引揚者で、また文学に携わっていることが私と同じであったので、かなり以前から関心を持っていた。

横浜の自宅を朝早く出て、羽田空港からJALに乗った。俳句雑誌「花冠」代表の妻と二人の旅となった。松山空港では、花冠同人の藤田洋子さんが出迎えてくれ、松山市内のホテルまで車の運転をもらった。七日の午後は、喫茶店を貸し切ったの句会、ホテルのレストランでの懇親会などを十名ほどの少人数で楽しんだ。

ミュージカル「正岡子規」の観劇は、四月八日の午後となった。松山市内から坊っちゃん劇場までは、クルマで三十分ほどの田園地帯にある。今は珍しい麦畑があちこちにあって、青麦の美しく力強い風景が広がっていた。私の心は、無理なく、ミュージカル・子規に向かっていた。

午後二時開演、一時間四十五分の上演は、ミュージカル・子規が喜劇であることに納得させた。子規を思って、涙がこぼれそうで、こぼれることのなかつ

た、まさに喜劇であった。大衆芸能の明るさがあった、芭蕉の「高くこころをさとりて俗に帰るべし」という「俗なるもの」を思った。

俳句が大衆の生活に入り込んだ「俗なるもの」に、その総合性を見た。明るく広がりのある世界であり、ミュージカルに生かされた新しい時代の俳句を予見させた。俳句の大衆性と総合性である。俳句は、古くから色紙・短冊に書かれ、また、軸物となつて、座敷を飾ってきた。書と結びつき、床の間では、生け花と一体となつた。生活の中の文学・芸術である。

ミュージカル・子規の装置は、土屋茂昭によるものであった。その大道具、小道具、その舞台美術に注目した。根岸の子規庵には、何度か訪ねたが、舞台の根岸子規庵は、その再現であつて、子規が寝ていた空間を現実のものとして見せ、その劇場空間が二十一世紀の今に相応しく新鮮であつた。木と紙で出来た障子の舞台が新鮮であつた。都会の大劇場とは違って、四国松山近郊の、あまり広くない劇場がよかつた。文学、音楽、美術などとの総合芸術のよさを見たのであつた。

ミュージカルの中の演技、踊り、音楽によつて、俳句がいきいきとしていた。俳句の言葉が音楽によつて壊されていない。日本語の七五調、五七調といったリズムが生かされていた。

ノーベル賞作家の大江健三郎は、『子規の根源的テーマ』と題した短い文章で、「子規はまたいかなる私小説の作家よりも勇敢にかれの全体を見せている。細部にわたつて克明に。」と、言っているが、これは、文学・芸術において、「全体的、総合的」であることの重要性を述べたもので、ミュージカル「正岡子規」が二十一世紀の新しい総合芸術、総合俳句を示唆しているに違いないと思つた。高浜虚子を演じていた柳原悠二郎君は、「坊っちゃん劇場オフィシャルブログ」に自作の句を殆ど毎回載せている。四月六日のブログには、前日が誕生日であつたので、

祝われて生まれたこの日花盛り

悠二郎

という、いい句が載っている。初日翌々日の四月五日は「花盛り」で、いい日に生んだものだと、母親の美知子さんを笑わせた。

悠二郎君は、私が創刊した俳句雑誌「花冠」に、一九八九年の小学五年頃から自作の句を載せている。母の美知子さんが同人であつたご縁からで、俳句実作のキャリアが長い。小学生の頃は、

ベランダで美しくさく父の菊

などの俳句があつて、子どもらしいが、句としての品格がある。それが生長し、虚子の風格を舞台で見せてくれたのが嬉しい。

当時、私の俳句雑誌に投句していた小学生は、十数名の少数であつたが、二十年も過ぎ去つた今では、それぞれの道を歩いている。東大、慶大へもそれぞ

れ複数の子どもたちが進学した。京大、早大などへも進学した。それらの中にあって、悠二郎君は、ミュージカルを選び、俳人である私の前で高浜虚子を演じ、歌を歌ってくれた。東大出のキャリア官僚、慶大医学部出身の医師など様々な人生を歩いているが、私の目の前で今の生活の姿を見せてくれたのは、悠二郎君と句美子さんの二人だけである。句美子さんは、「俳句の未来人」として月刊俳句界に取り上げていただいた。

「多様な俳句への新たな展開を」が私の論考のテーマなので、私が主宰し、選評をした雑誌のかつての小学生たちが悠二郎君をはじめとし、今、様々な分野で活躍しているのを嬉しく思う。多様な俳句への、こうした新たな展開を思えば、俳句の未来は明るい。

四月九日、再度のミュージカル「正岡子規」を観て、花爛満の城下町松山を後にした。ここには、「坂の上の雲ミュージアム」があり、「伊丹十三記念館」がある。明治の正岡子規と秋山真之との交遊を思い、昭和の大江健三郎と伊丹十三との交遊を思った。この城下町からは、平成には平成の青春物語りがきくと生まれてくるに違いない。青春のある楽しみな町である。

私の論考「多様な俳句への新たな展開を」の今回は、ネットの中の俳句を取り上げたい。「総合俳句」を思えば、ミュージカルの中の俳句と同じように、ネットの中での俳句が気になるのである。

3 俳句とネットの時代

オーバーを脱ぎ捨て走る皆走る

祝 恵子

二十一世紀は、グローバル化（グローバリゼーション）の時代であって、高度情報化社会となった。キーワードは、グローバルと情報で、その一方では、格差拡大などの負の面がクローズアップされている。俳句は、こうした時代のなかで生きいきとした力を得ることができるか。あるいは、生きいきとした力を失い、衰退してしまうのか。俳句は、現代社会の危機的状況のなかでさえも輝きを失わず、その人間らしい言葉の力に人間の未来への励ましと救いを見せてくれるのか。私は、俳句の明るさと深さに、その未来があると確信している。

インターネットは、一九八九年のWWWの発明で世界的なネットワークとして大学や研究所で利用され、一九九〇年代に企業や自宅に移行した。日本最初の商用プロバイダーは一九九二年設立なので、私がインターネットを始めたら一九九三年は、まだパソコン通信が主流で、インターネット普及の流れはなかった。大学から自宅でのインターネットに移った私は、「ベッコアメ・インターネット」に加入したが、一九九四年設立の「ベッコアメ」は、インターネット普

及の流れを見越して、その先駆けとなった。そして一九九五年の *WINGS* によってインターネット普及の土台が出来てくると、インターネットは、爆発的な広まりを見せた。私が「インターネット俳句センター」というウェブサイトを立ち上げたのは、一九九六年の十一月で、一九九五年発売の *WINGS* がインターネットの明るい未来を私に確信させてくれたのである。

二〇〇三年発行の句集「旅衣」は、私の第三句集で、その「あとがき」では、長年、海外の俳句詩人と付き合い、インターナショナルで、グローバルな俳句と関わってきたが、今は、インターネットの俳句に関心があつて、ネット上での俳句交流に深く関わっている。芭蕉の「深い」俳句がインターネットの「明るい」世界でどのような進展をみるのか、楽しみなのである。日本の「深い」心が現代のインターネットに生かされ、グローバルな世界に受け入れられることを願っている。ネット上での新しい俳句を、私は、仮に「ネット新俳句」と名付けた。「明るくて深い現代語」の俳句である。

と、インターネットの「明るい」世界に触れ、「明るくて深い」ところの俳句を願ったが、インターネットが「明るい」ということは、どういうことなのか。そこを明らかにしたい。

インターネットは、一九八九年のWWWの発明、そして、一九九五年の *WINGS* の発売によって、その普及の流れが出来てくると、爆発的な広まりを見せた。WWWは、World Wide Webの略記で、「世界に広がる蜘蛛の巣」といった意味がある。世界に広がる蜘蛛の巣のように、個々のウェブページがWWW上で繋がつて、誰でも手軽に使うことのできる世界的なメディアとなった。インターネット上での俳句は、世界の無数の人々と繋がっている。多くの人々と繋がりが、この点が新聞・雑誌・テレビなどとは違い、インターネットの明るさである。世界へ向けて発信し、世界へ向けて解放されている。多様な人々との交流、多様な俳句との出会い、こうした明るさは、世界へ向けてのものであるが、それは、未来へ向けての明るさでもある。

現代資本主義社会は、マスコミの発達、大量生産、大衆の政治参加などによって支えられている大衆社会といつてよいが、インターネットは、こうした大衆社会の中で生まれ、大学や研究所から次第に企業や自宅に移行し、大衆社会の中深くへと受け入れられた。俳句がインターネットに取り入れられるということは、俳句がインターネットの大衆社会に取り入れられることであつて、そのことによつて、俳句の言葉は、より平明に、より明るいものとなる。俳句は、その歴史の流れの中で難解なものと平明なものがある。難解な俳句には、昭和初期の新興俳句運動があり、その発端は、秋桜子が虚子からの独立を宣言した一九三一年十月とする。平明な俳句には、これといった俳句運動がなく、体系的な、あるいは明晰な論を持っていない。平明であることによつて、その間

題意識が絞りきれないのである。二十一世紀は、グローバル化の時代であり、ネットの時代である。大衆化がますます進んで、明るい社会が見られるが、負の面を見落としてはならない。二十一世紀の社会は、インターネットによって、大衆化が進むが、それに伴っての画一化の進行は、何か明るいのだが、個性の喪失へ、人間性の喪失へと向かう。大衆化した社会では、個々の人間の現実からの逃避も見逃せない。

俳句が文学であり、文化であるならば、画一性を避け、多様性が重要な課題となる。十年ほど前の「朝日新聞」2001年11月5日の「天声人語」では、「きょうはユネスコ憲章記念日だった。」とし、「それに先立つ総会では「文化の多様性」を尊重する宣言が採択され、この「多様性」こそが人類の共有財産であることがうたわれた。」と書いているが、「花冠」では、既に第3号(1983年12月号)の「川本臥風俳論抄」で「文化の多様性」を取り上げている。

文化において大切な事は画一性ではなくて、多様性である。「世界の富とは、世界の持つ独創的な人間を指しているのであって、その存在、活動によって初めて世界は世界であり混沌でなくなってくる。」こんな意味の事をカーライルは言っているが、この見方からすれば、俳句が独自の存在であればあるだけ、その存在を尊重し、世界に向かって主張する事こそ、文化国家として、世界文化に寄与せんとする意図にそうものであろう。

私は、「明るくて深い」ところの俳句を願い、インターネットの世界に新しい時代の「明るい」俳句を見たいと、論考「多様な俳句への新たな展開を」を進めてきたが、インターネットの大衆化による画一性は、文化の多様性、俳句の多様性とは相容れない。この画一性を克服するための個人における多様性、そして俳句の総合性についての論に移りたい。

3 総合俳句論

第一章の「習慣の疲弊」では、現俳壇の多くの俳句には、「習慣の疲弊」があるのではないか、子規、虚子によって確立された近代俳句の有季定型は、かつては「堅固な習慣」であったが、今、「習慣の疲弊」があるのでないか、ということを指摘した。第二章のグローバル化時代の「調和ある多様性」では、山本健吉が「俳句様式」に拘って、碧梧桐と亜浪の流れの俳人を切り捨て、「現代俳句」を画一化、一元化の方向に向けたが、二十一世紀の、画一性と多様性の対立するグローバル化時代にあつての「調和ある多様性」に言及した。第三章から第七章に渡っては、俳句様式の埒外にあると見られた俳句、また川柳、現代詩にも言及し、多様な俳句への可能性を探った。第八章から第九章に渡っては、私たちが目指している「明るくて深い」ところの俳句を語った。第十章で

は、ミュージカルで歌われた俳句の世界を取り上げ、第十一章では、インターネットの「明るい」世界での俳句の世界を取り上げた。第十章と第十一章で取り上げたのは、ミュージカルやインターネットの大衆化による明るさであって、その画一性から逃れるためには、俳句の多様性、そして俳句の総合性を語らねばならない。第十二章の総合俳句論は、「多様な俳句への新たな展開を」の最終章であって、私の願っている「明るくて深い」ところのある俳句を語っての結論である。

「明るい」ことと「深い」ことは、相矛盾するもので、一句の言葉に表現されたものではない。それは、詠み手の心であり、また読み手の心にもある。詠み手と読み手の心境、心の姿といったものである。第九章の「明るさと深さ」での劇作家岸田國士の言葉を思い起こしていただきたい。岸田國士は、「文学の中に人生」よりも、「人生を觀てゐる作者の眼」に文学の真実を見て、「『明るい文学』とは作品の中に光つてゐる『作者の眼の明るい輝き』以外のものではない。」と、作者の心の姿といったところを逃さない。また、川本臥風の言葉を思い起こしていただきたい。臥風の「まこと」は、「ただ心を澄し、感能を鋭くして自然を如実に見る事のみ」ではなく、「大きな、深い人生觀が伴つた自然感、」つまり、「自然を感じる事、自然の意味を讀む事」にあつて、「一生の修行を必要とするまことである。」と言いつ切る。

俳句の詠み手の、こうした心の姿は、一句の言葉を詮索するだけでは、明らかにならない。文学とか、芸術とか、作り手の表現された一部をいくら詮索しても明らかにならない。詠み手の心の姿は、詠み手の総体が関わっているので、その総体が明らかにならなければ、詠み手の心の姿は見えてこない。俳句が伝統文学であつて、伝統や伝承には、その民族のしきたり等の総体が関わっている。信仰、習俗、伝説等の総体が関わっている。俳句を、日本の伝統文化の総体の中で捉えようとするならば、俳句を日本の思想や信仰と切り離してしまうわけにはいかない。俳句の本質は、日本の思想・信仰の中に隠されていて、そこを明らかにしなければ、俳句はわからないのである。

日本人の古くからある思惟方法は、「与えられた現実の容認」ということなのである。『比較思想論』というユニークで綿密な業績をなしたげだ中村元は、日本人の思惟方法の第一の特徴としては、

まず第一の特徴は、「与えられた現実の容認」ということです。われわれは与えられた現実の中で生きている、それをそのまま認めるという觀念です。このテーマのもとに、いろいろまたサブタイトルをつけることができ、特徴がいくつかあげられます。そのうちのひとつとして、まず「現象界における絶対者の把握」があります。絶対のものはどこにあるか。西アジアの宗教や西洋の思想においては、人間を離れたかなたにそれを求めようとします。神と

人との間には絶対の断絶があるわけです。ところが日本の場合には、絶対のものを現象界の内においてとらえようとする。その考え方はすでに古神道に見られます。たとえば山があればその山を御神体として拝み、川があれば、川の神をあがめる。木には神が宿ると考え、石にさえも神がましますという。謡曲にも例があります。

いづくにか神の宿らぬ影ならん。嶺も、尾の上も、松杉も、山、河、海、村、野田、残るかたなく神のます。

こういう考え方がわれわれの中にずっと続いているわけです。

と、日本の思想・信仰を論じた。俳句の本質論も、この「与えられた現実の容認」に尽きるのである。また日本の仏教の方で、「即身成仏」とか、「人々無量寿所遇皆極楽」とか言っているのと、根本のところでは同じであろう。仏教の論理「色即是空」では、現実の世界にこそ真実がある、とする考えであり、真実は、他ならぬ現実の世界に見ることができるとする態度なのである。芭蕉の「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ（三冊子）」という教えは、時宗の祖として知られている捨聖一遍上人が「華の事は華にとへ、紫雲の事は紫雲にとへ、一遍はしらず（一遍上人語録）」と語っているのと同じであろう。

俳句は、伝統文化であるので、総合的に、総体的に捉えなければならぬであらうし、「心外無仏」という言葉があるように、俳句を総合的に見るならば、俳句の真の姿は、読み手の心の外には無く、読み手の心の外にも無い。

俳句に出会えば、読み手は、大自然と交歓する詠み手の大我、その心の姿を讀んでいただければ、と願い、私の総合俳句論「多様な俳句への新たな展開を」を終る。

いつ見ても梅寂光の中にあり

芽吹く樹へつきつき心遊ばせる

臥風

信之